

金沢大学附属図書館における利用教育・学修支援活動の成果と課題

Achievements and further issues of user instruction and learning support activities in Kanazawa University Library

橋 洋 平
Yohei HASHI

抄録：1980年代後半以降、金沢大学附属図書館で行ってきた利用教育・学修支援活動の変遷を5フェーズに分けて整理した後、現在、アクティブ・ラーニング型授業支援として、図書館が行っている授業、学修相談、セミナー、イベント等の内容を「授業内／外」、「フォーマル／インフォーマル」の観点で分けて紹介する。その活動のベースには、大学全体のミッション、各種補助金の活用、ラーニング・コモンズという場、図書館職員によるワーキンググループ及び教職・学生協働による実施、LMSの活用等がある。最後にその成果と課題をまとめる。

キーワード：利用教育、学修支援、アクティブ・ラーニング、ラーニング・コモンズ、教職・学生協働、初年次教育、国際化、金沢大学

1. はじめに

1.1 本稿の概要と目的

大学図書館に求められる役割は、時代とともに変化してきた。本稿では、1980年代後半以降、金沢大学附属図書館（以下「金大図書館」）で実施してきた利用教育・学修支援活動の変遷をまとめた後、現在、アクティブ・ラーニング（以下「AL」）型授業の支援を主目的として、図書館が授業内外で様々な形で実践している取り組みの中から、重点的に実施している活動を中心に紹介する。

また、大学図書館の利用者サービスの幅が重層的に広がる中、特定の大学図書館で、どのような枠組みで活動を継続してきたかを紹介することで、全国の大学図書館での利用者サービスのありかたを考える材料とし、全国の大学図書館の活動の高度化に資することが本稿の目的である。最後に、2020年3月以降急速に拡大した「コロナ禍」への今後の対応も含め、今後の課題をまとめる。

1.2 用語について

本稿のテーマは、大学図書館が主体となって実施する利用教育及び学修支援である。その内容を示す用語は、どの部分に重点を置くかによって、「利用者教育」、「利用指導」、「情報リテラシー教育」等複数の用語が使われてきた。インターネット上に無料

の学術情報が溢れるようになった現在、大学図書館で所蔵する資料の検索法の利用教育だけを切り離して行うことの意義は薄れ、初年次向けのアカデミック・スキル支援等を中心とした学修支援と一体化した利用教育が期待される時代になった。そのことを踏まえ、本稿では、図書館や検索ツールの利用法に関する「利用教育」とアカデミック・スキルに関する「学修支援」とをまとめ、「利用教育・学修支援」という用語を用いる。

2. 金大図書館における活動の変遷

この章では、金沢大学の教育研究機関としての特徴と近年の活動のポイントについて述べた後、大学図書館に利用教育・学修支援が求められるようになってきた背景と金大図書館での活動の変遷の概要を述べる。

2.1 金沢大学の概要

金沢大学は、前身機関の時代を含めると150年以上の歴史を持つ、3学域18学類（他大学の「学部・学科」に相当する教育上の単位）からなる総合大学である。国立大学法人化後は、大学憲章に「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念を掲げ、教育研究活動を行っている。

第3期中期目標期間中の国立大学運営費交付金の

「3つの重点支援の枠組み」では、「重点支援3：世界トップ大学と伍して卓越した教育研究を推進」を選択している。2017年度には、文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」に採択され、ナノ生命科学研究所を設立するなど、研究大学としてのスタンスを取っている。その一方、2014年度には、スーパーグローバル大学創成支援事業（以下「SGU事業」）及び大学教育再生加速プログラム（以下「AP事業」）に採択されるなど、教育研究の国際化とAL型授業の促進を外部からの補助金の活用をトリガーとして推進している。

教育については、卒業までに身に付けるべき5能力として、「金沢大学〈グローバル〉スタンダード」を策定し、これをベースに国際基幹教育院を中心に教養教育を実施している。

金沢大学が重点的に行う事業のマスタープランは、学長の名前を付した、YAMAZAKIプラン2020にまとめられており、金大図書館の活動も、これがベースとなっている。金大図書館としても、世界水準の研究の支援、AL型授業の支援、教育研究の国際化に寄与することが活動目標の一つになっている。

2.2 大学図書館に求められる役割の変化

学問を行う場としての大学は、社会からの要請に応じて、その教育研究の「内容」を変化させ、情報通信技術などの進歩に応じて、「方法」を変化させてきた。内容と方法は密接に関連しており、そのことを踏まえて、文部科学省等から随時出される高等教育に関する政策文書に対応する形で、各大学は教育研究内容を変化させてきた。

その変化は、個々の大学図書館が提供する資料の内容やメディアにも影響している。各大学での教育研究を支える学術情報を収集・提供・活用する場という基本的な役割は変化していないが、技術の進歩に応じて、所蔵（または管理）するメディアが大きく変化してきた。

1990年代以降、大学図書館を通じた情報提供サービスは大まかにいうと次のような形で変化し、役割が重層的に追加されてきている。

- ・**役割1**：紙媒体の本・学術雑誌論文等を探すためのツールを用意し、現物または複写物として入手可能にすること
- ・**役割2**：役割1に加え、電子媒体の本・学術雑誌論文等をインターネット上でアクセス可能にすること
- ・**役割3**：役割1、役割2に加え、授業時間外での学修支援を中心に、アカデミックな活動全体を支えるサービスや場を提供すること

インターネット上で無料入手できる学術情報が増大する中、大学図書館には、学術情報をインプットするための場から、インプットからアウトプットまでの全体を支える場へと脱皮することが期待されている。物理的な場としては、教員の研究のための情報収集の場がインターネット中心に移行する中、学生支援・学修支援サービスが中心になってきている。さらには、静かに学修する場から多様な学修ニーズに応える場へ。資料を探す場から、資料の活用法を身に付ける情報リテラシー教育の場へと、求められる機能が多様化してきている。

特に2010年代以降は、大学教育全体のパラダイムの変化にも呼応している。2012年、中央教育審議会から、教育の「質的転換」が提言され¹⁾、自学自習の充実、授業外学修時間の実質化、主体的・対話的で深い学修、すなわちALが求められるようになり、大学図書館については、ラーニング・コモンズ（以下「LC」）を中心とした学修の場及び学修支援の場としての期待が高まった。

そのことを受け、各大学図書館でも、伝統的に利用教育として行ってきた図書館利用法や各館所蔵資料についての検索法の指導に加え、館内のLCで、日常の学修、レポート作成、プレゼンテーション、卒論作成等に役立つアカデミック・スキルの涵養等についての人的支援・学修支援に取り組む大学が増えてきている。図書館サービスの内容としても、これらのスキルについての教育が特に求められる初年次学生に対する支援のウェイトが大きくなってきている。

2.3 金大図書館での利用教育・学修支援活動の変遷

金大図書館でも、以上の流れに合わせ、利用教育・学修支援活動の内容を変化させてきた。その変化は、館の新築・改築、館内へのLCの設置という、施設の物理的な変化や、国立大学の法人化といった大学を巡る環境の変化にも呼応してきた。1980年代後半以降は、以下の5つのフェーズに分けて捉えることができる。

- ・**フェーズ1（～1980年代後半）**：図書館単独で図書館オリエンテーション（印象づけ²⁾）のみを行っていた時代。
- ・**フェーズ2（1990年代前半～1999年）**：「印象づけ」に加え、図書館単独で「サービス案内」や「情報探索法指導」を行っていた時代。1989年以降、金沢大学では、キャンパス総合移転が始まり、まず中央図書館が新キャンパスに新築移転した。その頃、所蔵目録のオンライン化も始まり、OPACの運用が始まった。この時代は、OPACの利用説明会に加え、いくつかの情報検索サービスにつ

いての講習会や、館内ツアーを行っていた³⁾。

- ・ **フェーズ3 (2000年代前半)**: フェーズ2の内容に加え、金大図書館で提供している資料やサービスに関する総合科目「大学図書館への招待」(前期14回中、2回を図書館職員が担当。受講生は70名程度)を行っていた時代⁴⁾。ただし、「情報探索指導」については、館内のみで実施していたこともあり、大きな広がりを見せていなかった。
- ・ **フェーズ4 (2006年～2010年)**: 初年次教育に組み込まれた情報リテラシー教育が始まった時代。2004年の国立大学法人化後、金沢大学では2006年度にカリキュラムが刷新され、入学直後の初年次向け導入科目として「大学・社会生活論」「情報処理基礎」が始まり、その1コマに図書館オリエンテーション的な内容と情報検索法の基礎的な内容が組み込まれることになった。「印象づけ」「情報探索法指導」の部分が必須授業となったもので、現在も金大図書館の利用教育の核となっている。
- ・ **フェーズ5 (2010年～現在)**: AL型授業を支える利用教育・学修支援時代。2.2で述べた潮流に対応する形で、2010年3月中央図書館にLC(入口付近のカフェスペースも含む)が設置された(写真1, 2)。館内に会話可能スペースが広がったことの影響は大きく⁵⁾、新しい「場」を使った人的支援として、図書館利用教育の枠を越えた各種学修支援活動が教職・学生協働で行われるようになった。



写真1 中央図書館オープンスタジオ



写真2 中央図書館ブックラウンジ
(カフェを中心とした多目的ラウンジ)

金大図書館の場合、2014年のSGU事業採択後、教育の国際化に関するミッションの一部(留学生向け学修支援と日常的な国際交流の場の提供)も担当することになった。所蔵資料に関するレファレンス・サービスや利用教育といった大学図書館としての基本的な活動に加えて、学修支援及び国際交流まで活動の幅を広げることになった。これを契機として、館内で行われる活動については、関連教員や学生との協働で実施する機会が増加した。

金大図書館では、以上のような流れで、利用教育・学修支援活動を多様化させてきた。次章では、フェーズ4以降の現在の活動について紹介する。

3. AL型授業を支える活動

3.1 AL型授業支援活動の分類

AL型授業支援に対応した大学図書館の役割は、①資料整備、②環境整備、③サービスの充実の3つに分けられる。①はALの前提となる基礎資料の提供、②はLC等、AL型授業を支援する場の提供ということになるが、ここでは省略する。以下、③サービスの充実について、次の2つの軸をもとに分類する。

・ 軸1: 授業内/授業外で行う活動

・ 軸2: フォーマル/インフォーマルな活動(特定の学問分野に対応しているかどうか)

これを図化し、そこに金大図書館で実施している活動をプロットしたものが、図1である。

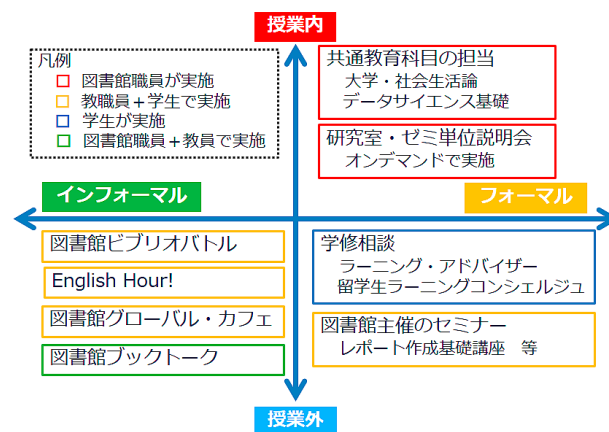


図1 AL型授業を支える活動の分類

3.2 各類型の内容

図1の4つの象限のうち、「授業内でのインフォーマルな活動」は、直接図書館が関与する余地が少ないため、「授業内でのフォーマルな活動」「授業外でのフォーマルな活動」「授業外でのインフォーマルな活動」の3つの類型に分けて説明する⁶⁾。

3.2.1 授業内でのフォーマルな活動

授業に組み込まれた活動としては、図書館担当の授業と研究室・ゼミ単位での説明会の2つを行っている。

3.2.1.1 図書館担当の授業

前章で述べたとおり、フェーズ4以降、初年次対象の共通教育科目「大学・社会生活論」及び「データサイエンス基礎（2019年度までは「情報処理基礎」）の中の1コマずつについて、図書館職員が主担当となって、講義・実習を行っている。

フェーズ3で実施していた総合科目は受講者数が70名程度だったため、特定係が担当していたが、これらの科目では全新生（約1800名）を対象に90分の授業を2回程度担当することになり、準備・実施のための負担が増大した。単一係で実施することは不可能であるため、フェーズ4以降は、図書館職員総動員で実施している。

2010年度以降は、LCでの他の学修支援活動を含めて、図書館職員からなる「学術情報リテラシー教育推進ワーキンググループ（以下「WG」。主査：情報サービス課長）で内容を企画・見直しを行いながら実施している。

各授業の内容及び工夫している点は次のとおりである。

(1) 大学・社会生活論

- ・授業名：「大学図書館の利用法」
- ・内容：新生を対象とした図書館オリエンテーション的な内容。各学類の教員が図書館利用に関する体験談（約20分）を話した後、図書館利用案内動画（約15分）を視聴。その後、スライド資料を使って、図書館職員が図書館利用法について、利用案内リーフレットや図書館報を参照しながら説明。最後、授業の要点についての「穴埋めシート」を受講生に記入してもらった後、答え合わせ。
- ・担当者：図書館職員13名（2019年度）
- ・工夫している点：授業が単調にならないよう、体験談、動画、シート記入等を組み合わせている。図書館報の新生向け企画（館内スタンプラリー）の案内を行い、図書館に出向かせるための動機づけを行っている。

(2) データサイエンス基礎

- ・授業名：「学術情報の探し方」
- ・内容：大学での学修・レポート作成等のために必要となる学術情報検索ツールの概要をタイプごとに紹介後、OPAC及び日本語文献検索用データベースCiNii Articlesについて検索実習。授業後、金沢

大学の学内者向けポータルサイト上にあるLMS（Learning Management System）内に用意した「図書館検定」を実施してもらい、90点以上で合格。

- ・担当者：図書館職員11名（2019年度）
- ・工夫している点：OPACの利用方法の説明については、説明内容が多いため、数年前にOPAC利用案内動画（5分×3本）を作成し、そのうちの基礎編を事前視聴してもらう形にしている。授業ではその内容を補うことを中心とし、その分、実習時間を長くした。



写真3 データサイエンス基礎の授業風景

3.2.1.2 研究室・ゼミ等単位での説明会の実施

3.2.1.1のとおり、図書館を活用した学術文献の探索法については、入学初年度に全学生に対して説明を行っているが、本格的に文献探索が必要になる3年生以降になると記憶に残っていないケースが多い。また、医学・保健系を中心に、各分野の専門的なデータベースを中心とした内容が求められることが多い。そういった、教員や学類からの要望に応える「オンデマンド」の形でも説明会を実施している。これらについては、学内の4館・室のサービス担当者が分担して、以下のような授業等で実施している（2019年度の実施回数・受講者数の合計：14回、534名）。

- (1) 初年次導入科目「初學者ゼミ」（1年生対象）：図書館内のツアーの実施。「大学・社会生活論」の授業は附属図書館内では行っていないため、それを補うために、希望に応じて実施するもの。
- (2) 医学類「基礎配属者学生に対する文献検索実習」（3年生対象）
- (3) 保健学類「看護研究概論」（3年生対象）、「看護研究法特論」（大学院生対象）
- (4) その他、特定の研究室・ゼミからの要望に応じて各分野の文献探索法についてゼミ等の中で説

明

3.2.2 授業外でのフォーマルな活動

授業外における活動は、フェーズ4までは、図書館内で行う文献探索法に関するセミナーが中心だったが、参加者数的には低調だった。この状況が変わったのは、やはり、中央図書館にLCが設置された2010年以降のフェーズ5である。LCの定義に「人的支援」が含まれていることと、大学教育の「質的転換」に対応して、授業外学修時間の充実が求められるようになったことを踏まえ、図書館主催のセミナーに加え、学生同士でのピアサポートによる学修支援制度等を、以下のとおり実施している。

3.2.2.1 学修相談

ピアサポートによる学修支援活動として、ラーニング・アドバイザー（以下「LA」）、留学生ラーニングコンシェルジュ（以下「LeCIS」）、さらには、アカデミック・アドバイザー（以下「AA」）教員によるアカデミック・スキルに関する学修相談を館内のラーニングサポートデスクで実施している。

(1) LA

・内容：LAの日本人学生・大学院生が、中央図書館のLC内で、休業期間中以外の平日午後（3時間15分）に対面での学修相談等を実施。内容は、日常の学修方法、図書館の活用法、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法等のアカデミック・スキル全般及び理系基礎科目等担当者の得意科目。以上に加え、留学生からの日本語学習に関する質問にも対応。

・担当者：指導教員の推薦を得た3年生以上の学生・大学院生の中から面接により6名を採用（2019年度、年度途中での入れ替え含む）。採用後、勤務の基本に関する研修を実施しているが、学修支援スキル等については、自学自習としている。

・対応数：112人（2019年度）

・実施の経緯：2010年のLC設置後、当初、図書館学生ボランティア「とぼら」による学修相談を試行的に実施していたが、利用がほとんどなかった。その後、2012年度に金沢大学が大学間連携共同教育推進事業に採択され、特定の授業と結びつける形のLAが中央図書館でスタートした（当初はLAに加え、国際基幹教育院の特任助教が館内で対応）。この事業は、2015年度以降は、AP事業のアカデミック・ラーニング・アドバイザー（ALA）に継承され⁷⁾、附属図書館のLAは特定の授業とは結びつかない基礎的な内容についての学修支援を担当する新

LAとなり、現在に至っている。

・予算：2015～2017年度については、金大教育GPという、学内の競争的予算で実施。2018年度以降は、附属図書館事業費で実施。



写真4 LA（左）及びLeCIS（右）による学修相談（中央図書館）

(2) LeCIS

・内容：LeCISの大学院生（主として留学生）が、中央図書館及び自然科学系図書館のLC内で平日午後（3時間15分）に対面での学修相談等を実施。内容はLAと同様だが、日本人学生からの外国語学習に関する質問にも対応。また、附属図書館業務の支援も職務の中に含めており、事務文書の翻訳等も行っている。2018年度以降は、中央図書館のLeCISの活動については、LAと合同で実施。

・担当者：13名（2019年度、年度途中での入れ替え含む）。指導教員等の推薦を得た大学院生の中から面接により採用。研修等はLAと同様。

・対応数：89人（2019年度）

・実施の経緯：2015年度以降、金沢大学で採択されたSGU事業の附属図書館担当の事業として開始。

・予算：SGU事業予算から支出。

以上のとおり、LAとLeCISの活動については予算の出所が違っているが、内容はほぼ同様で、対象も重なり合っているため、2020年度以降は、SGU事業終了後を見越して、ライブラリー・ラーニング・アドバイザー（LiLA）として統合する予定である。

(3) AA

・内容：2017年度以降、国際基幹教育院所属の特任助教がAAとして、LAと同様の形で対面での学修相談を実施。2019年度は、文系及び理系の2名のAA教員がLAの後の時間帯に合計週4回担当。

・実施の経緯：2018年度以降、金沢大学では、文系後期一括入試・理系後期一括入試が行われるようになり、総合教育部に入学した学生については、2年次以降に所属学類を決める制度が始まった。その進路選択・履修支援を担当するためにAA教員が採用された。その活動の延長として、附属図書館内で学修相談を行うことになったもの。

3.2.2.2 図書館主催のセミナー

図書館主催によるアカデミック・スキルに関するセミナーは、フェーズ2から実施しているが、内容の幅が広がったのは、やはりLCが設置されたフェーズ5以降である。従来から行っていた文献探索法に関するセミナーに加え、レポートの書き方の基礎を図書館職員が説明する「レポート作成基礎講座」を2010年度から始めた。さらに、LA, LeCISが館内で活動を始めてからは、彼らの自主企画によるセミナーを行ったり、レポート作成基礎講座を分担してもらうなど、図書館職員・学生の協働が進んでいる。

また、これらの活動の認知度を高めるため、初年次学生の授業が行われる総合教育棟まで図書館職員、LA, LeCISが向かい合いつつ昼休み時間に大教室を借りてセミナーを行う「ランチョンセミナー」も2018年度以降実施している。2019年度は10回実施し、186人の参加があった。図書館内で行ってきた「レポート作成基礎講座」についても、ランチョンセミナーの中でLAが講師となって実施する形の方が参加者数が多く（写真5）、今後も活動の一つとしていく予定である。

実施内容は、年度によって異なるが、2019年度は表1のような内容を、各時期に実施した。その他、金大図書館で契約している文献検索用データベース等についての講習会を外部業者等が実施しているが、ここでは省略する。



写真5 LAによる総合教育棟でのランチョンセミナー

表1 図書館主催のセミナー（2019年度）

名称（回数・参加者数）	時期	主対象／担当
留学生向け図書館利用説明会（7回・21名）	4月、10月	留学生／図書館職員＋LeCIS
レポート作成基礎講座（3回・51人 ※ランチョンセミナーでの参加者数も含む）	5-7月	1・2年生／図書館職員＋LA
文献収集法講座（5回・14人）	7月、10月	3・4年生／図書館職員＋LA
留学生のための大学院試験対策座談会（1回・6名）	1月	留学生／LA
卒論スタート座談会（1回・4名）	1月	3年生／図書館職員＋LA
ランチョンセミナー（10回・186人） ※以下の内容を実施 - 大学での「学び」 - レポート作成基礎講座 - Wordの使い方 - Excelの使い方 - PowerPointの使い方 - 留学生のための日本語学習法 - TOEICスコアアップのための英語学習法 - 留学のための英語学習入門	4-7月	1・2年生等／図書館職員＋LA＋LeCIS＋AA

3.2.3 授業外でのインフォーマルな活動

3.2.1, 3.2.2については、大学での学問の基礎になるスキルや特定の学問分野に結びつくような内容を意識して実施してきたが、フェーズ5以降は、特定の科目に直接結びつかず、活動を通して参加者に知的刺激を与えたり、学修に対するモチベーションを上げるようなインフォーマルな活動も増えてきた。大学の授業では、授業の本筋よりも、教員が話した雑談の方が印象に残ることがあるが、それと同様のことが、授業と授業外についても言えるのではないだろうか。大学図書館は、大学内での「知的なコモンズ（共有地）」でもある。色々な学問分野が気軽な雰囲気の中で融合する出会いの場になることを期待しつつ、インフォーマルな活動を実施している。金大図書館の場合、SGU事業採択後に課された「日常的な国際化の促進の場」「留学生支援」というミッ

ションを意識した内容も増えてきている。

実施内容は、年度によって異なるが、次のようなものが定着している。

(1) 図書館ビブリオバトル

・内容：4人程度の学生が、自分が推薦する本について5分ずつプレゼンテーションを行った後、参加者全員でディスカッション。最後にいちばん読みたいと思った本を投票で決める書評イベント。2019年度は5回実施。そのうち3回は、全国大学ビブリオバトルの北陸地区予選を兼ねて実施⁸⁾。

・時間・場所：中央図書館ブックラウンジ（カフェのあるスペース）で昼休みの時間帯に実施。

・実施の経緯：前述の大学間連携共同教育推進事業の事業として、2013年度以降、金大図書館で実施することになったもの。

・担当：司会は、旧LA事業担当の特任助教が担当後、現在はAA教員が引き継いでいる。図書館職員は、参加学生集めや当日の進行補助を行っている。

(2) English Hour!

・内容：AA教員またはLeCISが総合司会となり、アイスブレイクを行った後、複数のテーブルに分かれて、留学生を中心に各回のトピックについて自由に英会話を行うもの。2019年度は24回実施し、194名参加⁹⁾(写真6)。

・時間・場所：中央図書館及び自然科学系図書館内の国際交流スタジオで、平日午後1時間。

・経緯：SGU事業で求められている国際交流スタジオでの英語活用及び日常的な国際交流の促進を実現するため、2016年度以降実施。

・担当：AA教員が、各回のトピックや例文を書いたスライドを作成。LeCISに加え、英語ネイティブが多い短期留学生もファシリテータとして活用。図書館職員は、広報及び当日の進行補助を担当。



写真6 国際交流スタジオでのEnglish Hour!

(3) 図書館グローバルカフェ

・内容：留学経験のある学生及び金沢大学への留学生に体験談を発表してもらった後、質疑応答を行うもの。無料のドリンクサービスも行っている。2019年度は2回実施し、63名参加。

・時間・場所：中央図書館ブックラウンジで昼休みの時間帯に実施。

・実施の経緯：SGU事業の目標の一つである海外大学への留学者数増を目的に2017年度以降、SGU事業の一貫で実施。金大図書館には、EU情報センターが設置されており、従来から「EUカフェ」として欧州関係のイベントを行っていたがそれを拡大したもの。

・担当：図書館職員が、発表者募集、広報、当日の司会、準備等を全て担当。

(4) 図書館ブックトーク

・内容：金沢大学の教員等に推薦図書等を中心とした本に関する気軽なトークを行ってもらうもの。2018年度は2回実施、2019年度は出版社社長5名によるスペシャル版を実施。

・実施の経緯：図書館報連載の「金大生のための読書案内 - 教員から学生へ」については、館内で連動した展示も行ってきたが、それに加える形で、2018年度に開始。

・担当：聞き手としてLAを活用。図書館職員はその他の業務を担当。

・時間・場所：回によって変えている。

4. 成果と課題

以上、金大図書館で現在実施している活動を、経緯や変遷を含めながら紹介した。大まかにまとめると、文献探索法に関する図書館利用教育のみを行っていたものが、学修支援、国際化支援へと幅を広げ、さらにインフォーマルな内容も付け加わってきている。その拡大のベースになっているのが、LCという場所の力であり、教員や学生との協働であり、予算的には各種補助金である。LC自体、オープンな共有地であるが、サービスや企画についても、色々な内容を受け入れるオープンなものになってきていると言える。

以下、フェーズ2以降の活動に何らかの形で関わってきた図書館職員の立場から、以上の活動の成果と課題を自己点検・評価的に整理する。最後に、2020年度に予期せぬ形で発生した「コロナ禍」後の課題を加えて「まとめ」とする。

4.1 成果

金大図書館での特徴的な活動及びその成果は以下のとおりである。

(1) 教職・学生協働による実践の定着

図書館職員と教員・学生との協働による学修支援体制が定着してきている。それぞれの得意分野を活かすことにより、国際交流活動を定期的に行うなど活動の幅が広がり、図書館サービスの活性化につながっている。その協働のベースになっているのが、LC という場の存在である。

(2) 実施方法の多様化

利用教育に関しては、全1年生に対して、「印象づけ」、「情報探索法指導」を学内ポータル上のLMSをベースに複数の教材を組み合わせながら、WGを中心とした係横断的な体制で実施していることが特徴である。この体制により、10年以上、担当者間でのバラツキの比較的小さい標準的な内容で実施してきた。また、授業の担当自体が図書館職員の専門的知識についてのSDにつながっている側面もある。

(3) 実施内容の進化

図書館主催で実施している利用教育・学修支援活動の中に、図書館利用法より一歩進んだ内容を含むようになってきている。従来は「情報探索法指導」的な内容が中心だったが、例えば、「レポートの書き方」や学術情報の発信に関する内容など、「情報表現法指導」に含まれる内容もメニューに加わって来ている。このことも、LCを活用した教員・学生との協働がベースにあり、WG体制での実施によって実現できているものである。本格的な内容とまでは言えないが、その分敷居は低めで、初年次からのニーズには応えていると考えられる。

(4) サードスペースでのインフォーマルな活動

中央図書館のカフェスペースは、特定の学類に属さない「サードスペース」¹⁰⁾的な場所として、学内で行われた各種アンケートでも学生からの評価は高い。ここで行っているインフォーマルな活動は、金大図書館の活動の特徴の1つである。今後も定常的に行い、学問分野の壁を越えて、図書館の利用者に対して、知的な刺激やモチベーションを与える活動となることを目指している。

4.2 課題

一方、今後の課題は以下のとおりである。

(1) 全学的な学修支援体制の中への位置づけ

LA及びLeCISによる活動は2020年度で6年目になるが、サポートデスクでの相談件数は増えておらず、依然として活動の認知度を高めることが課題となっている。その前提として、初年次を対象としたレポートライティングを中心としたアカデミック・スキル教育についての全学的な整理が必要であり、その中に図書館で行う授業外での学修支援活動を位置づける必要があると思われる。

(2) 学修支援担当者のスキルの向上

現在、各担当者の支援スキルは、自学自習に依っている状態である。利用者からの信頼性を高めるためにも、アカデミック・ライティングの指導に関する研修や授業の受講を必須化するなど、支援内容の組織的なレベルアップが求められている。

(3) 学修支援の場の整備

LA及びLeCISは、主に中央図書館及び自然科学系図書館のLC内で活動を行っているが、①中央図書館カフェスペースの混雑、②対面による学修相談スペースの認知度の低さ、③グループ学修用スペースの不足などが金大図書館で実施した最新の自己点検・評価¹¹⁾でも指摘されており、学生のニーズをとらえた学修環境の改善が必要である。

4.3 「アフター・コロナ」に向けて

最後に、2020年になって、突如湧き上がった新型コロナウイルス感染症に関する問題にも触れておきたい。

この感染症の拡大は、これまで金沢大学で重要課題として取り組んできた、授業のAL化やグローバル化の促進に急ブレーキを掛けるものだった。授業でのグループワークが禁止され、館内のLCも閉鎖された。その代わりに実施されたのが、LMS上のeラーニング教材による遠隔授業だった。金沢大学の場合、4～6月中旬まで全授業が遠隔授業で行われ、金大図書館が担当している上述の初年次向け授業についても、急遽教材にナレーションを吹き込み、eラーニング化することで対応した。

全学的に対応できたのは、国立大学法人化後、「高度情報化社会に対応できる情報処理の基礎能力・総合力を持った人材育成」を目的として、金沢大学に次のようなインフラが整備されていたことによる¹²⁾。①全学生のノートPC必携義務化方針(2006年度以降)、②全学生・教職員に生涯ID(金沢大学ID)が配付され、ポータルサイトが利用可能になっ

ていたこと (2009年度以降), ③ポータル上の LMS に全授業が登録されていたこと (2005年度以降順次拡大)。

コロナ対応の長期化が予想される中, 大学図書館が担当する利用教育・学修支援活動についても, 当面は, スイッチを切り替えるように, 活動のモードを変えることが求められるだろう。例えば, 遠隔会議システムを使った学修支援やインフォーマルな活動の実施が必要になると考えられる。金大図書館でも, それに向けての取り組みを始めたばかりである。その内容が「新しい学修支援スタイル」として定着したものが「フェーズ 6」となると予想している。

今後, 大学図書館が担当する学修支援についても, 全学の遠隔授業実施のベースとなっている LMS 上での存在感を発揮する必要があるだろう。そのためには, コロナ以前の「実世界」での学修支援の場合同様, 学生や教員との協働が不可欠であり, 大学図書館間での先進的事例やノウハウの共有が必要であると考ええる。

注・参考文献

- 1) 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申), 2012. (オンライン), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (参照2020-05-30)
- 2) 本稿の記述で用いた「印象づけ」, 「サービス案内」, 「情報探索法指導」, 「情報表現法指導」という用語は, 「図書館利用教育ガイドライン」の領域 1, 領域 2, 領域 3, 領域 5 を示す用語である。その内容は以下の文献参照。
日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ハンドブック: 大学図書館版. 東京, 日本図書館協会, 2003. 209p. (4-8204-0230-7)
- 3) 橋洋平. 金沢大学附属図書館中央館における利用者教育. 大学図書館研究. 1992. 39, 55-62. (オンライン), <https://doi.org/10.20722/jcul.322>, (参照2020-05-30)
橋洋平. 金沢大学附属図書館中央館における利用者教育の実践と問題点. 私立短期大学東海・北陸地区図書館協議会会報. 1995. 26, 47-53. (オンライン), <http://hdl.handle.net/2297/1775>, (参照2020-05-30)
- 4) 米澤章雄. 金沢大学附属図書館における総合科目の開設について. 金沢大学教養教育機構研究調査部報.

1999, 3, 29-32.

- 5) 柴田正良, 山内祐平, 山田政寛, 橋洋平. 学びの空間は図書館をどう変えるか? (巻頭対談・完全版). 金沢大学附属図書館報こだま. 2011, 175別冊, 1-20 (オンライン), <http://hdl.handle.net/2297/28573>, (参照2020-05-30)
- 6) この章の内容は, 以下の発表に加筆し, 再構成したものである。
橋洋平. 金沢大学附属図書館における学修支援の現状と課題: アクティブ・ラーニング型授業を支える活動の紹介. 平成30年度福井地区大学図書館協議会夏季研修会発表資料, 2018. (オンライン), <http://doi.org/10.24517/00052063>, (参照2020-05-30)
- 7) 2014年度に開始した AP 事業の金沢大学での取り組みや ALA については, 以下を参照。
杉森公一, 河内真美, 上畠洋佑. アクティブ・ラーニング導入によるカリキュラム・教育方法・学修支援環境の統合的な改革: 金沢大学 (特集 教学マネジメントの試み(2)). 大学教育と情報. 2016, 2015(4), 11-15. (オンライン), http://www.juce.jp/LINK/journal/1602/pdf/02_03.pdf, (参照2020-05-30)
- 8) 特集「ビブリオバトルのすすめ」. 金沢大学附属図書館報こだま. 2015, 187, 1-3. (オンライン), <http://hdl.handle.net/2297/42967>, (参照2020-05-30)
- 9) 井上咲希. 金沢大学における英会話イベント「English Hour!」実践報告. 金沢大学国際機構紀要. 2019, 1, 31-44. (オンライン), <http://doi.org/10.24517/00054018>, (参照2020-05-30)
- 10) レイ・オルデンバーグ著; 忠平美幸訳. サードプレイス: コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. 東京, みすず書房, 2013, 480, (9784622077800)
- 11) 金沢大学附属図書館. 令和元年度金沢大学附属図書館自己点検・評価報告書. 金沢大学附属図書館, 2020. (オンライン), <https://library.kanazawa-u.ac.jp/files/hyoka/tenkenR1.pdf>, (参照2020-05-30)
- 12) 森祥寛, 佐藤正英, 松本豊司, 青木健一. 金沢大学におけるポータルの教育利用について. 大学 ICT 推進協議会2011年度年次大会論文集. 2011, A13-1, 411-416. (オンライン), https://axies.jp/_files/report/publications/papers/papers2011/2011_A13-1.pdf, (参照2020-07-23)

<2020. 8. 28 受理>

はし ようへい 金沢大学附属図書館情報サービス課長